

半七捕物帳

あま酒売

岡本綺堂

青空文庫

「また怪談ですかえ」と、半七老人は笑った。「時候は秋で、今夜は雨がふる。まったくあつらえ向きに出来ているんですが、こっちにどうもあつらえむきの種がないんですよ。なるほど、今とちがつて江戸時代には怪談がたくさんありました。わたくしもいろいろの話をきいています。商売の方で手がけた事件に怪談というものは少ないものです。いつかお話しした津の国屋だって、大詰へ行くとあれです」

「しかし、あの話は面白うござんしたよ」と、わたしは云った。

「あんな話はありませんか」

「さあ」と、老人は首をかしげて考えていた。「あれとは又、すこし行き方が違いますがね。こんな変な話がありましたよ。これはわたくしにも本当のことはよく判らないんですがね」

「それはどんなことでした」と、わたしは催促するように云った。
「まあ、待ってください。あなたはどうも気がみじかい」

老人は人をじらすように悠々と茶をのみはじめた。秋の雨はびしやびしやというような音をたてて降っていた。

「よく降りますね」

外の雨に耳をかたむけて、あたまの上の電燈をちよつと仰いで、老人はやがて口を切った。

「安政四年の正月から三月にかけて可怪おかしなことを云い触らすものが出来たんです。それはどういう事件かというと、毎日暮れ六ツ——俗にいう『逢魔おうまが時とき』の刻限から、ひとりの婆さんが甘酒を売りに出る。女のことですから天秤をかつぐのじゃありません。きたない風呂敷に包んだ箱を肩に引つけて、あま酒の固練かたねりと云つて売りあるく。それだけならば別に不思議はないんですが、この婆さんは決して昼は出て来ない。いつでも日が暮れて、寺々のゆう六ツの鐘が鳴り出すと、丁度それを合図のようにどこからかふらふらと出て来る。いや、それだけならまだ不思議という段には至らないんですが、うっかりその婆さんのそばへ寄ると、きつと病人になつて、軽いので七日なのかや十日とおかは寝る。ひどいのは死ん

でしまう。実におそろしい話です。その噂がそれからそれへと伝わって、気の弱いものは逢魔が時を過ぎると銭湯せんとうへも行かないという始末。今日の人達はそんな馬鹿な事があるものかと一と口に云ってしまおうでしょうが、その頃の人間はみんな正直ですから、そんな噂を聞くと竦毛おぞけをふるって怖がります。しかも論より証拠、その婆さんに出逢わつて煩わいずららついた者が幾人もあるんだから仕方がありません。あなた方はそれをどう思います」

私にはすぐに返事が出来ないのです、ただ黙って相手の顔を見つめてみると、老人はさもこそといったような顔をして、しずかにその怪談を説きはじめた。

その怪しい婆さんを見た者の説明によると、かれはもう七十を

越えているらしい。麻のように白く黄いろい髪を手拭につつんで、頭のうしろでしつかりと結んでいた。筒袖かとも思われるような袂のせまい^{あわせ}袷の上に、手織り^{じま}縞のような綿入れの袖無し^{はんでん}半纏をきて、片^{かたづま}袂を端折^{はしよ}つて藁草履をはいているが、その草履の音がいやにびしゃびしゃと響くということであつた。しかしその人相をよく見識つている者が無い。かれに一度出逢つた者も、うす暗いなか^{ふくろう}に浮き出している梟のような大きい眼、鳶^{とんび}の口^{くちばし}嘴のような尖つた鼻、骸骨のように白く黄いろい歯、それを別々に記憶しているばかりで、それを一つにまとめて人間らしい者の顔をかんがえ出すことは出来なかつた。

かれは唯ふらふらと迷い歩いているのではない、あま酒を売つ

ているのである。なんにも知らずにその甘酒を買った者もたくさんあったが、その甘酒に中毒したものはなかった。又その甘酒を買った者がごとく病みついたというわけでもなかった。往來でうっかり出逢った者のうちでも、なんの祟りも無しに済んだものもあった。つまりめいめいの運次第で、ある者は崇られ、ある者は無難であつた。いずれにしても婆さんの方は何事を仕向けるのでもない。ただ黙つてゆき違うばかりで、不運の者はその一剎那におそろしい災難に付きまといられるのであつた。

眼にも見えないその怪異に取り憑かれたものは、最初に一種の瘡疾おこりにかかったように、時々ひどい悪寒さむけがして苦しみ悩むのである。それが三日四日を過ぎると更に怪しい症状を表わして來て、

病人はうつむいて両足を長くのばし、両手を腰の方へ長く垂れて、さながら魚の泳ぐような、蛇の蜿のたくるような奇怪な形をして這いまわる。さりとて家うちじゆうを這いまわるのでもない。大抵は敷蒲団の上を境として、その上を前へうしろへ、右へ左へ蜿うつののである。それが魚というよりむしろ蛇に近いので、看病の人たちはうす気味悪がった。思いなしか病人の眼は蛇のように忌いやらしくみえて、口から時々紅い舌をへらへらと吐く。こうした気味の悪い病症を三日五日も続けた後に、病人の熱は忘れたように冷めてけろりと本復するが、病中のことはなんにも記憶していない。なにを訊きいても知らないという。しかしそれらは軽い方で、重いものになるとその奇怪の症状を幾日も続けているうちに、とうとう病

み疲れて藻掻^{もが}き死にの浅ましい終りを遂げる者もあつた。それが僅かに一人や二人であつたならば、蛇を殺した祟りとでも云われそうなことであつたが、なにをいうにも大勢であるために、その病人をことごとく蛇を殺した人間と認めるわけにも行かなかつた。殊にそのなかには蛇を殺すどころか、絵に描いた十二支の蛇を見てさえも身をすくめるような若い娘たちもあつたので、蛇の祟りと決めてしまうことは出来なかつた。

「と云つても、あの蜿くる姿はどうしても蛇だ」

こつちに崇られるような覚えがなくても、向うから崇るのであろう。蛇に魅^みこまれるという伝説は昔からたくさんある。どう考へてもあの婆さんはやはり蛇の化身^{けしん}で、なにかの意味で或る男や

或る女を魅こむに相違ない。この説が結局は勝を占めて、怪しい老婆の正体は蛇であると決められてしまった。それが更に尾鱗おひれを添えて、ある剛胆な男がそつと彼の婆かさんのあとをつけて行くと、かれは不忍池しのばずのいけの水を渡つてどこへか姿を隠したなどと、見て来たように吹聴ふいちようする者もあらわれて来た。不忍の弁天に参詣して巳みの日の御まもりをうけて来た者は、その禍いを逃がれることが出来るなどと、まことしやかに説明する者もあらわれた。

それが町方まちかたの耳にはいると、役人たちも打ちやつて置くわけには行かなくなつた。由来、かような怪しい風説を流布るふして世間を騒がす者は、それぞれ処罰されるのが此の時代おきての掟であつたが、それが跡方もない風説とのみ認められないので、先ずその本

人のあま酒売りを詮議せんぎすることになった。しかし、彼女の立ち廻る場所がどの方面とも限られていないので、江戸じゅうの岡っ引一同に対してかれの素姓あらためを命ぜられ、次第によつては即座に召し捕つて苦しからずということであつた。

八丁堀同心伊丹文五郎は半七を呼んでささやいた。

「今度の一件を貴様はどう思ふか知らねえが、悪くすると磔はりつけ刑のお仕置ものだぞ。その積りでしつかりやつてくれ」

「クルスでございますかえ」

半七は人差指で十字の形を空くうに書いてみせると、文五郎はうなずいた。

「さすがに貴様は眼が高い。蛇の崇りなんぞはどうも真まに受けら

れねえ。ひよつとすると切支丹キリシタンだ。奴らがなにか邪法を行なうのかも知れねえから、そこへ見当をつけて詮せん索さくしてみろ」

こつちも内々それに目星をつけたので、半七はすぐに受け合つて帰つた。しかし、どこから先ず手を着けていいのか、彼もさすがに方角が立たないので、家へ帰つてからも眼をとじて考えていたが、やがて台所の方にむかつて声をかけた。

「おい、誰かそこにいるか」

「あい」

台所につづいた六畳の間に、大きい火鉢を取りまいていた善八と幸次郎とがばらばらと起たつて来た。

「おめえたちはあま酒売りの婆さんを知っているか」と、半七は

訊いた。

「出つくわしたことはありませんが、噂だけは聞いています」と、善八は答えた。

「伊丹の旦那からのお指図だ。どうにかしにやあならねえ。この一件は俺ばかりじゃねえ、みんなも総がかりでやる仕事だから、なんでも早い勝ちだ。そこであんまり知恵のねえ話だが、まあお定まりの段取りで仕方がねえ。おめえ達はこれから手わけをして、甘酒の卸し売りをする問屋をみんな探してくれ。婆ばばあだって自分の家であま酒を作るわけじゃあるめえ。きつとどこかで毎日仕入れて来るんだろうから、そういう変な婆が来るか来ねえか、方々の店で聞き合わせてくれ。こんなことは誰もがみんな手をつけるこ

とだろうが、こつちも心得のために一応は念をついて置かにやあならねえ」

ふたりの子分を出してやって、半七は午ひるめし飯を食つてしまふと、三月末の春の日はうららかに晴れていた。家にぼんやりと坐つてもいられないので、半七はどこをあても無しに神田の家を出て、百本杭ぐいから吾妻橋あずまの方角へ、大川端をぶらぶらと歩いてゆくと、向島の桜はまだ青葉にはなり切らないので、遅い花見らしい男や女の群れがときどきに通つた。その賑やかな群れのあいだを苦労ありそうにしよんぼりとうつむき勝ちに歩いている一人の若い男が、その蒼ぎめた顔をあげて半七の姿をふと見付けると、なんだか臆病らしい眼をしながら彼のあとをそつと尾つけて来るらしかつ

た。

最初は素知らぬ顔をしていたが、こつちの横顔をぬすむように窺いながら三、四間ほども付いて来るので、半七も勃然^{むっ}として立ち停まった。

「おい、大哥^{あにい}。わっしになにか用でもあるのかえ。花見どきに人の腰を狙つてくると、巾着^{きんちやつき}切りと間違えられるぜ」

睨み付けられて男はいよいよ怯^{おび}えたらしい低い声で、ごめんなさいと丁寧^{きざ}に挨拶して、そのままそこに立ちすくんでしまった。気障^{きざ}な野郎だと思ひながら、半七もそのまま通り過ぎたが、よほど行き過ぎてから彼はふと考えた。あの若い男の人相や風体は巾着切りなどではないらしい。勿論こつちで見覚えのない男である

が、或いは向うではこつちの顔を見知っていて、なにか話し掛けようとしながらも、つい気^き怯^おれがしてそのままに云いそびれてしまったのではあるまいか。もしそうならば暴^あら^らことばをかけるのではなかつたと、半七は少し気の毒になつて元来た方をふり返ると、男の姿はもう見えなかつた。

二

それから二日目の七ツ下がり（午後四時過ぎ）に、善八と幸次郎が半七の長火鉢のまえに鼻をそろえた。二人はほかの子分たちとも申し合わせて、江戸じゅうの間屋を片つ端から調べてあるい

たが、その怪しい婆さんは毎日おなじ家へ仕入れに来ないらしい。最初のうちは本^{ほん}所^{じょう} 四ツ目の大坂屋という店へ半月以上もつづけて来たが、その後ばったりと来なくなつた。近頃ではやはり四ツ目の水戸屋という店へ三日ほどつづいて来たが、水戸屋ではかれの噂を知っているのです、若い者のひとりが見えがくれにそのあとを尾^つけると、かれは浅草の方角に向つて遅^{のろ}々々とたどつて行つた。しかしどこまで行つても際限がないので、こつちもしまいに根^{こん}負けがして、途中から空しく引返して来た。こういう訳で、かれの居どころはたしかに突き留められなかつた。こつちに尾けられたことを彼女はおそらく覺^{さと}つたのであろう、そのあくる日から彼女は、その瘦せた姿を水戸屋の店先に見せなくなつた。それは

三月初めのことで、その後はどこの問屋を立ちまわっているか、誰も知っている者はないとのことであつた。

「ところで、親分。ついでに妙なことを聞き出して来たんですがね」と、善八は云つた。「やっぱりその婆に係り合いのあることなんです、なんでも五、六日まえの午過ぎだそうです。浅草の馬道うまみちに河内屋という質屋があります。その女中のお熊というのが近所へ使いに出ると、やがて真つ蒼になつて内へかけ込んで来て、自分の三畳の部屋をびっしやり閉め切つてしまつて、小さくなつて竦すくんでいたそうです。なんだか変だと思つてみると、誰が見つけたか知らねえが、河内屋の裏口に変な婆が来てそつと内をのぞいていゝといふので、番頭や小僧が行つて見ると、なるほ

ど忌いやに影のうすい婆が突つ立っている。変だとは思つたが、真つ昼間のことだから大きな声で唼どな鳴り付けると、婆は忌な眼をしてこつちをじつと見たばかりで、素直すなおに何処へか行つてしまった。行つてしまったのはいいが、その晩から番頭ひとりと小僧一人が瘡疾おこりのように急にふるえ出して、熱が高くなる、蒲団の上をのたくる。医者にみせても容態はわからない。相手が変な婆であつたもんだから、それもきつと例のあま酒婆だつたということ、家うちじゆうのものは竦毛おぞけをふるっているそうです。その時に出てみたのは、番頭ふたりと小僧一人だつたんですが、ひとりの番頭だけは運よく助かつたとみえて、今になんにも崇りがなく、ほかの二人が人身御供ひとみごころにあがつた訳なんです、妙なこともあるじゃあり

ませんか。してみると、その婆は夜ばかりでなく、昼間でもそこらにうろついているに相違ねえというんで、近所の者もみんな蒼くなっているんですよ」

「そうして、その熊という女はどうした。それには別条ねえのか」
「その女中にはなんにも変ったことはないそうです。なんでも使いに行つて帰つてくると、その途中から変な婆がつけて来て、薄っ気味悪くて堪まらねえので、一生懸命に逃げて来たんだということですよ」

「おめえはその女を見たのか」

「見ません。なんでも河内屋へ出入りの小間物屋の世話で住み込んだ女で、年は十九か二十歳はたちぐらいだが、台所働きにはちつと惜

しいような代物しろものだそうですねよ」

「その小間物屋というのは何という奴だ」と半七はまた訊きいた。

「その小間物屋はわつしが識しっています」と、幸次郎が代かつて答えた。「徳という野郎で、徳三郎か徳兵衛か知りませんが、まだ

二十二三の生なまつ白しろい奴です。道楽者で江戸にもいらねえんで、

小間物をついで旅あきないをしていたんですが、去年の七、八月ごろから江戸へまた舞まい戻かつて来て、どこかの二階借かりをして相変あらず小間物の荷かを担かぎあるいているようです」

「そうか。よし、判わつた。じゃあ、おめえはその徳という野郎の居いどこをさがして引ひつ張はつて来てくれ。おれはその馬道の質屋へ行いつて、もう少し種かを洗あつてくるから」

「わっしも行きましようか」と、善八は顔をつき出した。

「そうよ。又どんな用がねえとも限らねえ。一緒にあゆんでくれ」
「ようがす」

善八を案内者につれて、半七が馬道へゆき着いた頃には、このごろの長い日ももう暮れかかつて、しょうでん 聖天の森の影もどんよりと陰くもつていた。

「なんだか忌いやな空合いになって来ましたね」と、善八は空を仰ぎながら云った。

「むむ。まったくいやな空だ。今夜は一つ降るかも知れねえ」

つむじかぜ
旋風

のような風が俄かにどっと吹き出して、往来には真つ

白な砂けむりが渦をまいて転げまわった。ふたりは片袖で顔おほを掩

いながら、町屋まちやの軒下を伝つて歩いてみると、夕ぐれの色はいよいよ黒くなつて来て、どこかで雷の声聞きこえた。

「おや、雷が鳴る。妙な陽気だな」

そのうちに、ふたりは河内屋の暖簾のれんの前に来たので、善八はすぐに格子をくぐつて、帳場にいる番頭に声をかけた。

「もし、番頭さん。親分がすこし用があるんだ。ここじゃあいけねえから、表までちよいと顔を貸してくんねえ」

「はい、はい」

四十五六の番頭が帳場から出て来て、暖簾の外に立っている半七に挨拶した。

「お前さんがここの番頭さんかえ」と、半七は手拭で顔の砂をは

らいながら訊きいた。

「さようでございます。利八と申して、河内屋に三十四年勤めて居ります。どうぞお見識り置きを……」

「そこで利八さん。早速だがお前さんにちつと訊ききたいことがある。この間、こつちの裏口を変な婆さんが覗のぞいていたとかいうじやありませんか」

「はい。とんだ災難で、番頭ひとりと小僧一人が今にどつと寝付いて居ります」

利八の話によると、番頭と小僧はきようまで熱が下がらないで、なまころ生殺しの蛇のようにのた蜿うち廻っている。奉公人どもは気味を悪がって誰も寄り付かないので、主人と自分とが代る代るに看病し

ているが、なかなか三日や四日では癒なほりそうもない。世間の噂を総合してかんがえると、その時の怪しい婆さんはどうも彼の甘酒か売りらしく思われる。実はきのうの午過ぎにも、その婆さんらしい女が店の前をうろ付いているのを近所のものが認めたとかいうので、この上にも重ねてどんな禍いがあるうかと、自分たちも内々恐れていると、かれは小声で半七に訴えた。

「それからお前さんの家うちにお熊という女がいるそうですね」

「はい。西さいしやく国生まれだそうで、年は明けて十九でございませう。ちようど去年の九月、今までの奉公人が急病で暇をとりまして、出代り時でもないもんですから、差し当りその代りの女に困つて居りますところへ、てまえ方へ質を置きにまいります徳三郎とい

う小間物屋さんが、時にこんな女があるから使ってくれないかと申しますので、ちようど幸いと存じて雇い入れましたような訳でございしますが、人柄も悪くなし、人間も正直でよく働きます。で、これはよい奉公人を置きあてたと申して、主人を始めわたくし共も喜んで居ります」

「こつちに親戚でもあるんですかえ」

「なんでも芝の方の御屋敷の足輕を頼つてまいつたのだそうでございます。と申しますと、まことに不念ぶねんのようぶねんで恐れ入りますが、なにぶん手前どもでも困っている矢先でもあり、徳さんが万事をひき受けると申しますものですから、その上にくわしくも詮議いたしませんで……」と、利八は小鬢こびんをかきながら答えた。

「その後、そのお熊になにも変った様子は無いんですね」

「別に変ったこともございませんが、一度その婆さんにあとを尾つけられてから、表へ出るのをひどく忌いやがるので困ります。もつともそれは無理もありませんので、大抵の使いにはほかの小僧を出して居りますが、当人も別に病氣というわけでもございませんから、家の内ではいつもの通りに働いて居ります。御用があるなら唯今呼んでまいりましょうか」

「いや、呼んじやあまずい」と、半七は首を振った。「うら口へまわって、そつとのぞくわけにやあ行きませんか」

「よろしゅうございます。ちようど夕方でございますから、台所ではたらいで居ります筈です。どうぞ隣りの露路からおはいりく

ださい」

利八に教えられて、半七はせまい露路の溝どぶ板いたを踏んでゆくと、この二、三日なまあたたかい天気がつづいたので、そこらではもう早い蚊の唸うなる声こえがきこえた。半七は手拭を取って頬かむりをし、草履の足音を忍ばせながら、河内屋の水みず口くちに身をよせていると、ひとりの若い女が手桶をさげて来た。うす暗い夕闇のなかにも其の白い顔だけは浮き出してみえた。と思う途端に、彼女はそこに忍んでいる半七の姿を見付けてあわただしく小声で訊いた。

「徳さんかえ」

徳さんという男の地声じこえを知らないので、半七は早速に作り声をするわけにも行かなかつた。かれは頬かむりのままで無言にうな

ずくと、若い女は摺り寄って来た。

「おまえさん、この頃どうして来てくれないの。あれほど約束したのを忘れたのかえ」

こつちがやはり黙っているので、女はすこしおかしく思ったらしい、だしぬけに片手をのばして半七の頬かむりを引きめくつた。うす暗いなかでもその人違いをすぐに発見したらしく、かれはあれつと叫びながら手桶をほうり出して内へ逃げ込んだ。

手拭も一緒にほうり出されたので、半七はそれを拾って泥をはたいてみると、その頭の上を大きい雷ががらがらと鳴って通つた。

表へ出ると、利八と善八が待つていた。今鳴った雷の音につれて、雹ひょうのような大粒の雨がばらばらと落ちて来たので、利八はしばらく雨やどりをして行けと勧めたが、半七はそれを断わって、そのかわりに番傘を一本借りて出た。

「親分、相合傘あいあいがさじゃあ凌しのげそうもありませんぜ」と、善八は云った。

「まあ、仕方がねえ。尻はしよでも端折れ」

雷はだんだん烈しくなつて、傘をたたき破るかと思うような大雨が、どうどうと降りそそいで来た。ふたりの鼻のさきに青い稲妻が走った。

「親分、いけねえ、意気地がねえようだが、もう歩かれねえ」

善八がひどく雷を嫌うことを半七もかねて知っているのと、時刻も丁度暮れ六ツ頃であるのとで、かれは雨宿りながらにそこらの小料理屋へはいって、ともかくも夕飯を食うことにしたが、雷はそれから小こ一晌いっときも鳴りつづいたので、善八は口唇くちびるの色をかえて縮み上がってしまった。彼は眼の前にならんでいる膳を見ながら、好きな酒の猪口ちよこをも取らなかつた。話を仕掛けても碌々に返事もしなかつた。

小間物屋の徳三郎とお熊との関係はもう判つた。徳三郎は旅商いに出ているあいだに、どこかでお熊と馴染なじみになつて、かれを誘い出して江戸へ帰つて来たが、差し当りは女の始末に困つて、河

内屋へ奉公に住み込ませたに相違ない。それと同時に、このあいだ大川端で自分に声をかけようとした若い男は、その徳三郎であったらしくも思われて来た。かれは蒼ざめた顔をして、自分に何事を訴えようとしたのか、半七はいろいろに想像を描いていると、雷の音もだんだんに遠ざかって、善八は生き返ったように元気が出た。

「親分、すまねえ。まずこれでほつとしやした。また移り換えもしねえうちから酷いひど目に逢いましたよ」

「いい塩あんばい梅に小降りになったようだ。早く飯を食ってしまえ」

早々に飯を食ってそこを出ると、夜は五ツ（午後八時）を過ぎているらしかった。雨はもう小降りになっていたが、弱い稲妻は

まだ善八をおびやかすように、時々ふたりの傘の上をすべって通った。雷門の方へ爪先を向けた半七は急に立ち停まった。

「おい、もう一度河内屋へ行つて見ようじゃねえか。考えると、どうも少し気になることがある。もう雨もやんだから、この傘を返しながらお熊という女はどうしているか訊きいてくれ」

二人はまた引つ返して河内屋へ行つた。善八だけが内へはいつて、お熊はどうしているかと番頭に訊くと、利八はやはり台所にいる筈だと答えた。しかし念のために見て来ましようと言つて、かれは帳場から起たつて行つたが、やがてあわただしく戻つて来て、お熊の姿はどこにも見えないと云つた。善八もおどろいて、すぐに表へ飛び出して注ちゆうしん進しんすると、半七は舌打ちした。

「まずいことをしたな。どうもあの女がおかしいと思つたんだ。いつそあの時すぐに引き挙げてしまえばよかつた。畜生、どこへ行つたらう」

どっちへ行つたか其の方角が立たないので、二人はぼんやりと門かどぐち口に突つ立っていると、どこかで女の声がきこえた。

「甘酒や、あま酒の固練り……」

物に魘おそわれたように二人はぎよつとした。そうして、その声のする方角を一度透かしてみると、今の強い雨でどこの店も大戸を半分ぐらゐは閉めてしまつたが、そのあいだから流れ出して来る灯のひかりは往来のぬかるみを薄白く照らして、雷門の方から跣は足だしでびしゃびしゃあるいて来る女の黒い影がまぼろしのように浮

いてみえた。世間にあま酒を売つてあるく者は幾人もある。殊にその声があまり若々しく冴えてひびくので、半七は少し躊躇ちゆうちよしたが、ともかくも善八を促うながして路ばたの軒下に身をひそめっていると、声の主はだんだんに近寄つて来た。かれはあま酒の箱を肩にかけて、びしよ濡れになっているらしかった。ふたりは呼吸いきをのんで窺つてみると、かれは河内屋のまえに来て吸い付けられたように俄かに立ち停まった。声は若々しいのに似合わず、彼女がたしかに老女であることを知ったときに半七の胸は波を打った。かれは先ず河内屋の表をうかがつて、更に露路口の方へまわつた。半七もそつと軒下をぬけ出して露路の口からのぞいて見ると、彼女は河内屋の水口にたたずんで、しばらく内を窺っているらし

かったが、やがて又引つ返して表へ出て来た。ここですぐに取り押さえようか、もうちつと放し飼いにして置いて其の成り行きを見とどけようかと、半七はちよつと思案したが、結局黙つてそのあとを尾^つけてゆくことにした。善八もつづいて歩き出した。二人はさつきから跣足になつていたので、雨あがりのぬかるみを踏んでゆく足音が相手に注意をひくのを恐れて、わざと五、六間も引きさがつて忍んで行つた。

河内屋の露路を出てから、彼女はあま酒の固練りを呼ばなくなつた。かれは往来のまん中を黙つて俯^{うつむ}向いてゆくらしかつた。

「親分。たしかに彼女^{あいつ}でしようね」と、善八はささやいた。

「河内屋を覗いて行つたんだから、あの婆^{ばばあ}に相違ねえ」

云ううちに彼女の姿は消えるように隠れてしまったので、ふたりは又おどろいた。善八は少しおじ気が付いたように立ちすくんだ。吉原へゆくらしい駕籠が二挺つづいて飛ぶようにここを駆けぬけて通ると、その提灯の火に照らされて、かれの痩せた姿は又ぼんやりと暗やみの底から浮き出した。その途端に、かれは思い出したように一と声呼んだ。

「あま酒の固練り……」

この声がしずかな夜の往来に冴えてひびくと、通りぬけた駕籠の一挺が俄かに停まった。ひとりの武士らしい男が垂簾たれをはねて、彼女のそばにつかつかと進み寄った。そうして、なにか小声でふた言三言押し問答しているかと思うと、白い刃のひかりが提灯の

火にきらりと映つて、婆は抜き打ちに斬り倒された。かれは声も立てないで、枯れ木を倒したように泥^{ぬかるみ}凪のなかに横たわつた。武士は刀を納めて再び駕籠に乗ろうとするとところへ、半七は駈け寄つてその棒鼻をさえぎつた。

「しばらくお待ちくださいまし。わたくしは町^{まち}方^{かた}の者でござい
ます。唯今のは試し斬りでございませうか、それとも何か仔細がござ
いますか」

たといそれが武士であろうとも、みだりに試し斬りなどをすれば立派な罪人である。次第によつては、かれも切腹の罪^{つみ}科^{とが}は免
かれない。相手を斬つてうまく逃げおおせればいいが、それが町
方の眼にとまったりすると、甚だ面倒になる。飛んだところを見

つけられて、武士はひどく迷惑したらしく、しばらく口籠つて躊躇していると、まえの駕籠からも一人の武士が出て来た。どちらも若い武士であったが、新らしく出て来た一人は幾らか場慣れてゐるらしく、半七にむかつて我々は決して試し斬りではないと弁解した。しかし、その仔細を云うわけには行かない。屋敷の名を明かすわけにも行かない。どうかこのまま見逃がしてくれと彼はしきりに頼んだが、半七は素直に承知しなかつた。一旦自分の眼にとまつた以上、見す見す人殺しを見逃がすことは出来ないといふ張つた。それは勿論正当の理窟であつたが、もう一つには折角ここまで追いつめて来た大事の捕り物を、横合から不意に出て来て玉無しにされてしまったという業^{ごうはら}腹がまじつて、半七は飽く

までも意地悪くこの武士を窘めいじにかかった。

窘められて、相手はいよいよ困つたらしく、結局は金づくで内済にしたいようなことまで云い出したが、半七はどうしても肯きかないで、とうとう彼等二人を再び駕籠にのせて、無理無体に近所の自身番へ引き摺って行つた。婆を斬つた若い武士はもう覚悟を決めているらしかった。

「たといなんと申されても屋敷の名を明かすわけにはまいらぬ。たつて役人に引き渡すとあれば、手前これにて切腹いたす」

こうなると、半七もなんだか可哀そうにもなつて来て、いつまでも彼等を窘めていられなくなつた。彼はほかの武士を表へ呼び出して、諭さとすようにささやいた。

「あなた方が辻斬りでないことは私も大抵察しています。ふたり連れで駕籠にのつて、辻斬りをしてあるくのは珍らしい。それにさつき見ていると、あの婆さんの甘酒の固練りという声を聞くと、急に駕籠を停めさせてあつちのお武家が出て行つた。それにはなにか訳があるらしい。あなた方はあの婆さんを御存じなんですかえ。御存じならば話してください。その訳さえわかれば、なにも無理に屋敷の名を聞くにも及びません。実を云うと、わたくしはこの間からあの婆さんを尾^つけているんです。それを横合いからだしぬけにばつさりとやられてしまつちやあ、わたくしの役目が立ちません。それを察して正直に話してください。くどくも云うようだが、訳さえわかれば決して御迷惑はかけませんから」

武士はそれでもまだ渋っていたが、半七からいろいろに説きすかされて、彼もようよう納^{なつとく}得したらしく、内に引返して一方の武士と何かしばらくささやき合っていたが、結局思い切つてその事情を打ち明けることになった。

「では、屋敷の名は申さんでも宜しゅうござるな」

「よろしゅうございます」

なんとかして、彼等に口を明かせなければならぬので、その白状を聞かないまえに半七は安受け合いに受け合ってしまった。そうして、これから彼等がどんな秘密を打ち明けるかと、両方の耳を引き立てていると、あたかもそこへ足早に駆け込んで来た者があつた。

「ああ、親分。いいところへ来ていてくんなすった。小間物屋の野郎、とんだことをしやあがつて……女を殺しやがった」

それは小間物屋の居どころをさがしに行つた幸次郎であつた。

四

幸次郎は小間物屋の徳三郎の居どころを探しあてて、田町に近い荒物屋の二階へたずねてゆくと、彼はあいにく留守であつた。また出直して来ようと思つて表へ出ると、あたかもかの雷雨が襲つて来たので、近所の知人の家へかけ込んで雨やどりをして、小降りになるのを待つて再びたずねていくと、下の婆さんはいなか

つた。そつと窺うと、二階には微かに人の唸るような声がきこえたので、彼は猶予なしに駈けあがると、うす暗い行燈あんどうのまえに若い女が血みどろになって俯向きに倒れていた。そのそばには徳三郎が血に染めた短刀を握つて、喪心そうしんしたようにぼんやりと坐っていた。どう見ても、かれが女を殺したとしか思えないので、幸次郎はその刃物をたたき落としてすぐに縄をかけた。徳三郎は別に抵抗もしなかつた。

倒れている女をあらためると、まだ微かに息が通っているらしかったので、幸次郎は近所の者を呼びあつめて医者を迎いにやつたが、その医者いしやの来ないうちに女は息が絶えてしまった。その出来事を報告するために、幸次郎は縄付きの徳三郎を近所のものに

張り番させて、とりあえずここへ駆け付けて来たのであった。

婆殺しと女殺しと二つの事件が同時にしゅつたい出来、しかもそれが何かの糸を引いているらしく思われたので、半七はすぐに徳三郎を自身番へひき出させた。真つ蒼になって牽ひかれて来た徳三郎は、たしかに大川端で出逢った若い男であった。

「おい、徳三郎。おれの顔を識っているか」

徳三郎は無言で頭を下げた。

「おれはまだ見ねえが、殺した女は河内屋のお熊だろう。とんでもねえことを仕出来しでかしやあがつた。手前なんで女を殺した。素直に申し立てろ」

「親分さん。それはお目違いでございます」と、徳三郎は喘あえぐよ

うに云った。「わたくしは決して女を殺しは致しません。お熊は自分で乳の下を突きましたのでございます。わたくしが慌てて刃物をもぎ取りましたけれど、もう間に合いませんでございました」

「その短刀は女が持っていたのか」

「いいえ、わたくしの品……」と、徳三郎は云いよどんだ。

「はつきり云え」と、半七は叱った。「てめえの短刀をどうして女に渡したんだ。てめえもまた商売柄に似合わねえ、なんで短刀なんぞを持っているんだ」

「はい」

「何がはいだ。はいや炭団たどんじや判らねえ。しつかり物を云え。お慈悲につめてえ水を一杯のましてやるから、逆上のぼせを下げた上で

おちついて申し立てろ。いいか」

善八が持つて来た茶碗の水を飲みほして、徳三郎は初めて一切の事情をとぎれとぎれに申し立てた。彼は浅草で相当な小間物屋の伴に生まれたが、放蕩のために身代をつぶして、一旦は江戸を^{たちの}立退くこととなった。やはり小間物の荷をかついで、旅あきないに諸国を流れ渡っているうちに、彼は京大阪から中国を経て九州路まで踏み込んだ。そうして、ある城下町にしばらく足を止めているあいだに、かれはその城下から一里ばかり距れたはな小さい村の女と親しくなった。女はかのお熊であった。お熊はお綱という老母と二人暮しであったが、この村の習いとしてほかの土地のものとは決して婚姻を許さない掟おきてになっているので、お熊は母を捨て

て逃げた。徳三郎もはじめは旅先のいたずらにすぎない色事いろごとで、その女を連れ出して逃げるほどの執心もなかったのであるが、かれに魅みこまれたが最後、もうどうしても逃げることの出来ない因果にまつわられていた。お熊はこの土地でいう蛇神へびがみの血統であつた。

ここらには蛇神という怖ろしい血統があつた。その血をうけて生まれた者は一種微妙の魔力をもつていて、かれらの眼に強く睨まれると其の相手はたちまち大熱に犯される。単にそればかりでなく、熱もたに悶もたえて苦しんで、さながら蛇のように蜿のたうちまわる。蛇神の名はそれから起つたのである。しかし、彼等はいかに眼を大きくして睨んだからといって、それだけでは決して相手に感応

させるわけには行かない。それにはかならず、強い感情を伴わなければならぬ。妬む^{ねた}、憎む、怨む、羨む、呪う、慕う^{かなし}、哀む、喜ぶ、恐れる。そうした喜怒哀楽の強い感情がみなぎったときに、かれらの眼のひかりは怖るべき魔力を以って初めて相手を魅することが出来るのである。したがって、彼ら自身も故意にその魔力を応用することが出来ない。あいつを一つ苦しめてやろうなどと悪^{いたずら}戯半分に睨んだところで、決してその効果はあらわれない。要するにそれは彼の心の奥から湧き出してくる自然の作用で、自分自身にも無理に抑える^{おさ}ことも出来ず、無理に働かせることも出来ず、唯その自然にまかせるほかはないのである。この村の者がほかの土地の者と結婚しないのも、この不思議な血統^{おも}が主なる原

因であつた。

徳三郎も初めてお熊に逢つたときに、この怪しい熱病に苦しめられて、お熊の手あつい看病をうけた。病いが癒なおつてから其の秘密を発見したが、今更どうすることも出来なかつた。捨てて逃げようとしても、お熊はどうしても離れない。それを無理にふり放そうとすれば、お熊の睨む眼が怖ろしかつた。もう一つには女が蛇神の血統であることを自分から正直に打ち明けて、どうぞ見捨ててくれるなど泣いて口説くどかれた時に、かれの心も弱くなつた。所詮はこれも因果とあきらめて、徳三郎はお熊を連れて逃げることを決心した。

かれの決心を強めたほかの動機は、かのおそろしい蛇神も箱根

を越せば唯の人間になつてしまつて、なんの不思議を見せることも出来ないという伝説を、土地の老人から聞き知つた為であつた。それならばさのみ恐れることもないと幾分か安心して、かれはお熊と共に江戸へ歸つた。九州の蛇神も江戸の土を踏めば唯の女になつたらしく、氣のせいか彼女の瞳のひかりも柔らかなになつた。

お熊は容貌きりようのよい情の深い女で、ほかに頼りのない身の上を投げかけて、かれ一人を杖とも柱とも取りすが縋つているのを徳三郎は惨いじらしくも思つた。こうして二人の愛情はいよいよ濃こまやかになつたが、なにぶんにも小間物の担ぎ商いをしてゐる現在の男の瘦腕では、江戸のまん中で女と二人の口を養つてゆくのがむずかしいので、相談ずくの上でしばらく分かれ分かれに働くこととなつて、

お熊は男の口入れで河内屋に住み込んだ。幸いにその奉公先と徳三郎の宿とが遠くないので、お熊は主人の用の間をぬすんで時々男のところをたずねていた。

それで小半年は先ず無事にすごしたが、ことしの春になって此の若い二人の魂をおびやかすような事件が突然出来しゅつたいした。二月のなかばの夕方に徳三郎が商売から帰る途中、浅草の広徳寺前でひとりの婆さんがあま酒の固練りを売っていたが、それはたしかにお熊の母のお綱であった。彼女は眼ざとく徳三郎を見つけて、つかつかと寄つてその袂を引つ掴つかんで、娘はどこにいるか直ぐに返せと叫んだ。徳三郎は死し神にがみに出合つたよりも怖ろしくなつて、殆ど夢中でかれを突き倒して逃げた。その晩から彼は大熱を発し

て、十日ばかりも蛇のように蜿うち廻つて苦しんだ。

箱根を越せば蛇神の祟りはないというのあても的にはならなかつた。

お綱はわが子のゆくえを尋ねて、九州から江戸まで遙々はるばると追つ

て来たのであろう。その強い執着心を思いやると、徳三郎はいよ

いよ怖ろしくなつて来たので、彼はお熊に因果をふくめて娘を母

の手に戻そうと覚悟したが、お熊はどうしても肯きかなかつた。男

にわかれて国へ帰るほどならば、いつそ死んでしまふと泣き狂う

ので、徳三郎も持て余した。そのうちに怪しい甘酒売りの噂はだ

んだん高くなつて、それはお綱であることを徳三郎とお熊だけは

知っていた。お熊は母に見付けられないように其の出入りを注意

していたが、徳三郎はどうかんがえても不安に堪えなかつた。世

間の評判が高くなるほど彼の恐怖はいよいよ強くなって、再びお綱に見つけられたが最後、今度こそはおそらく自分の命を奪とられるであろうと恐れられた。かれは実に生きている空もなかった。

こうした不安の日を送るうちに、彼は大川端で偶然に半七に出逢った。半七の方では彼を識らなかつたが、徳三郎の方ではその顔を見識っていたので、いつそ此の事情を何もかも打ち明けて彼の救いを求めようかと思つたが、やはり気き怯おれがしてとうとう云いそびれてしまった。しかし運命はだんだんに迫つて来た。お綱は根こんよく江戸じゆうを探しまわっているうちに、娘が河内屋に忍んでいることを此の頃いよいよ覺つたらしく、そこらに度々さまよつてゐるばかりか、現に河内屋の番頭や小僧が蛇神の崇りを受

けたという事実を見せられて、徳三郎の恐怖はもう絶頂に達した。彼は身のおそろしさの余りに、更に怖ろしい決心をかためて、今度お綱に出逢ったならば、いつそ彼女を殺してしまおうと思いつめた。徳三郎は短刀を買って、それをふところにして毎日商いあきなに出あるいていた。

彼が借りている荒物屋の二階へ今夜もお熊が忍んで来て、二人にとっては重大の問題がまた繰り返された。徳三郎は短刀を女にみせて、自分の最後の決心を打ち明けた。しか併し自分も好んでそんなことをしたくない。人を殺したことが露顕ろけんすれば自分も命をとられなければならない。ここでお前がわたしのことを思い切つて、すなおに母の手に戻ってくれれば三方が無事に済むのである。ど

うぞこれまでの縁とあきらめてくれと、彼はいろいろにお熊を説きなだめたが、女は強情に承知しなかった。彼女は泣いて泣いて、ものすごいほど狂い立って、いきなり男の短刀を奪い取って、自分の乳の下に深く突き透したのである。蛇神の血をひいた若い女は、こうして悲惨の死を遂げた。

「さりとは残念なこと。もう少し早くば、その娘だけは助けられたものを……」と、ふたりの武士はこの悲しい恋物語を聞き終って嘆息した。「この上はなにを隠そう、われわれはその蛇神の女と同国の者でござる」

彼等もやはり西国の或る藩士で、蛇神のことはかねて知っていた。このごろ江戸じゅうをさわがす怪しい甘酒売りの女は、どう

しても彼の蛇神かに相違あるまいと、江戸屋敷の者もみな鑑定して
いた。ついては早晩そうばんその女が捕われ、なにがし藩の領分内には
そんな奇怪な人種が棲んでいるなどと云い伝えられては、結局当
屋敷の外聞にもかかわることであるから、見つけ次第に討ち果た
せと重役から若侍一同に対して内密に云い渡されていたので、か
れら二人は今夜その使命を果たしたのであつた。しかし半七に対
して、あからさまにその事情を説明するときには、自然に屋敷の名
を出さなければならぬのと、もう一つには時と場所が悪い。か
れらは吉原へ遊びにゆく途中であつた。武士気質かたぎの強いかれらの
屋敷では、遊里に立ち入ることは厳禁されていた。かれらは半七
に意地わるく窘められて、屋敷の名や自分たちの身分を明かすよ

りも、むしろ死を扱えらぼうと覚悟したのであつた。

「これで此の一件も落らくぢやく着ちやくしました」と、半七老人はひと息ついた。「こう訳が判つてみると、誰が科とが人にんというのでもありません。その時代の習い、武士もこういう事情で斬つたという事であれば、やかましく云うわけにも行きません。わたくしもその事情を察して内分うちぶんにすることにしましたが、八丁堀の旦那だんなにだけはひと通り報告して置きました。徳三郎はこれぞという科とがもないんですが、なにしろこいつが女を引つ張り出して来たのがもとで、こんな騒さわぎを仕出しで来たんですから、遠島にもなるべきところを江戸払いで軽く済すみました。そうして、もう一度旅へ出るつもり

で江戸をはなれますと、神奈川に泊まった晩からまた俄かに大熱を発して、とうとうその宿で藻掻き死にに死んでしまったそうです。とんだ因果で可哀そうなことをしました。それでも徳三郎は本人ですから仕方がないとして、ほかの人達がなぜ祟られたのか判りません。おそらく前にも云ったような理窟で、ふと摺れ違ったりした時に、向うで何か羨ましいとか小癩こしやくにさわるとか思つて、じつと見つめると、すぐにこっちへ感じてしまうので、向うでは別に祟るといふほどの考えはなくとも、自然にこっちが祟られるような事になってしまったのでしよう。なんだか薄気味の悪い話です。一体その蛇神というのはどういうものかよく判りませんが、わたくしの懇意な者に九州の人がありまして、その人の話

によりますと、四国の犬神、九州の蛇神、それは昔から名高いもの
のだそうです。嘘のようなお話ですが、彼かの地にはまつたくこう
いう不思議の家筋の者があつて、ほかの家では決してその家筋の
ものと縁組などをしなかつたといひます。それに就いてまだいろ
いろな不思議のお話もありますが、まあこのくらいにして置きま
しょう。むかしはこの国にもこういう不思議な伝説がたくさん
あつたのですが、今こんにち日ではそんな噂もまつたく絶えてしまいま
した。学者がたに聞かせたら、それも一種の催眠術だとも云う
かも知れませんね」

青空文庫情報

底本：「時代推理小説 半七捕物帳（三）」光文社文庫、光文社

1986（昭和61）年5月20日初版1刷発行

1997（平成9）年5月15日11刷発行

入力：網迫

校正：おのしげひこ

2000年10月19日公開

2004年2月29日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

半七捕物帳

あま酒売

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>